

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

11月中旬、長野県長寿社会開発センターと大町保健福祉事務所が主催した大北地域タウニングにコメントーターの立場で参

加する機会があった。高齢者が、無理せず、気軽に、楽しみながら地域活動を基本に、社会参加に対する意識の向上を目的とした会議だ。神城断層地震は、「犠牲者ゼロの奇跡」として地域の絆が再評価され、地域で暮らす高齢者を考える絶好の機会を提供した。

今回の会議は、参加者誰もが会議の必要性を認識し、企画に携わったメンバーが「高齢者自身が考えてほしい」との理念がしっかりとあった。長寿社会開発センター理事長の内山二郎さんの巧みな話術も見

事だった。参加者に、5分間で参加者同士、多くの人と自己紹介して下さい。このプログラムだけで、多くの参加者に笑顔が広がり、会議に積極的に参加しようとの気持ち

メンテーターに、意見を求めていく。目的を持った催事では、「自らを考えさせる」手法が大切だが、それが実践できている現場は少ないのが実情だ。

同じ11月に白馬ウイニング21で、開催された。折念行事は、震災で経験したことを見つめ直す事、これからの復興について考える事、災害に強い地域社会を築く事を目的に開催された。だが、どれもが

未曾有の災害に直面し、1年たった今、関係者の努力によって想像を超える復旧対策が講じられている。しかし、復興への方針が被災者にとどの様に届いていたのだろうか。「もっと早く決断してほしかった」と、寂しげに話しながら会場を後にする姿に、むなしさを感じたのは私だ

目的を持った行・催事の在り方について考えてみませんか

黒板に課題を提示し「配布した付せん」に皆さんの考えを書いて教えて下さい」と投げかける。たちまち黒板の模造紙に、多くの付せんが。気になる回答の記入者にマイクを向け、そして、次々とコメント

長寿神城断層地震復興折念行事は、当初予定した進行スケジュールとは、大きく異なっていた。10分を予定した開式セレモニーは、来賓者のあいさつもあり倍以上の時間を要し、基調講演も予定時間を超

過した。そのために、期待していた5名の体験発表と意見交換の時間は驚くほど少なくなった。

折念行事は、震災で経験したことを見つめ直す事、これからの復興について考える事、災害に強い地域社会を築く事を目的に開催された。だが、どれもがあいまいになった事も事実だ。限られた時間に、多くの課題をテーマにして良かったのか、この時期、何に重点を置いて、企画するべきだったか考えさせられた。

未曽有の災害に直面し、1年たった今、関係者の努力によって想像を超える復旧対策が講じられている。しかし、復興への方針が被災者にとどの様に届いていたのだろうか。「もっと早く決断してほしかった」と、寂しげに話しながら会場を後にする姿に、むなしさを感じたのは私だ

行・催事の進め方によって、参加者の意識が高まり、笑顔が広がる現場がある



けだったのだろうか。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)